

第3回 じみ研ニュースレター

2015年7月

一般社団法人 地域の魅力研究所

多胡 秀人 info@jimiken.org

－ 異端児と社外取締役 －

リレバンが始まって12年余り経過しました。この間、全国の地域金融機関を回り、リレバン活動を先頭に立って推進している多くの人たちと接点を持ちました。皆さんとても魅力的でした。だからこそ、彼らリレバンの担い手たちはお客様からの支持も絶大だったものと推察されます。

そのリレバン担い手の1人、数年前に地域金融機関を辞職し、地元県庁にヘッドハントされて、地域活性化の仕事で活躍しているXさんと昨日電話で話をしました。

リレバン担い手の多くは金融機関の内部では異端児扱いを受けていましたが、Xさんはその最たる例でした。常に新しいことにチャレンジして新分野で実績を残していたXさんですが、上級管理職になってからは居心地が悪くなっていたように感じました。

グローバルな視点も含め、厳しい競争原理にさらされているメガバンクと比較すると、地域金融機関は緊張感の弱い組織体です。良く言えばアットホーム、悪く言えばぬるま湯体質であり、異端児が削ぎ落とされ純化した経営陣となりがちです。

トップの権限が強く、経営の意思決定が一方に傾きやすいというのも特徴です。このような経営体質の場合には異分子による牽制機能は非常に重要です。これが社外取締役の業務執行に対する監督機能(=ブレーキ役)だと思います。

さらに攻めのガバナンスという視点に立てば、競争原理や、グローバルな観点も加味した企業価値向上のためのモニタリングも社外取締役には求められます。地域金融機関の村社会に化学反応を起こさせるための「触媒」(アクセル役)といっても良いでしょう。

異端児(凡人の経営者からの視点ですが)が除去されて純化したお友達クラブにならないように業務執行を牽制し監督していくことは社外取締役の重要なミッションだとつくづく感じています。異端児たちが残っていったら、社外取締役が触媒となって、引き起こされる化学反応はより大きなものになるのだろうと、つくづく残念に思う今日この頃です